

海軍

引揚輸送船随想

長崎県 一瀬 千萬太

私は、終戦直後二カ月近く経った頃、復員中の艦艇乗組員は、邦人引揚輸送要員として旧艦艇に復帰するように、と新聞等での呼び掛けに応じて舞鶴に行った。約二カ月ぶりに見る艦は大砲、機銃等は取り払われており、かつての威容はなく、見る影もない姿に変わり果てていた。

佐世保へ回航し、補給を行い、隊を編成した。七隻からなる編隊だったと思っている。途中で四隻は別れマニラへ、残る我々の行先はフィリピン

の最南端ダバオであった。ダバオでは接岸するとは許されず、岸から離れた所に投錨させられた。三日目の二時過ぎ何の前触れもなく突然邦人を運んできた。船ではなく水陸両用の自動車であった。戦後間もない頃、大村でも時々見かけた舟の形をしたあの自動車である。

次々と運ばれてきて我々の艦では無事收容し終えた。ほとんどは年寄り、女子供だったと思っっている。甲板で出迎えた我々に涙を浮かべて感謝し、中には手を合わせお礼を述べながら乗り込んできた人もあった。山に逃げ込んでいたのをキャンプに收容されたとのこと。そこでの生活は安らかな日はなく、始終おどおどしていたらしい。辛かったこと、日本の艦に乗り込んでやっと人心地

がついた事など、ただたどしい言葉使いで話すのであった。

邦人への世話も一通り終わり我々は夕食をとっていた。食事半ば、艦の周囲がにわか騒々しくなってきた。聞くと僚艦への輸送で遅れていたのがあったが、目指す艦はもうすぐという所でバラスを崩し、転覆したとのことであった。同じく水陸両用の自動車であった。

雨が降り出し、波もただだしていた。各艦ボートや内火艇を出して救助に当たった。我が内火艇が一人を救い上げて来たが、既にこと切れていた。で陸上へ送り届けざるを得なかった。運転していた米兵は助かったとの事である。暗くなり各艦より探照灯で海を照らし救助を続けたが、果たして何人位助かったであろうか。

翌朝は晴れた穏やかな日であった。昨夜の騒動は跡形もなくきれいな海であった。ただ鏝の広い女用のシャツポが一つ、それに連れ添うように赤

い布のようなものが一枚、直ぐ近くをゆるやかに流れているのが見えた。昨夜から沈みもせず潮の干潮につれて漂っていたのだろう。その様子は今なお脳裏にありありと浮かぶ。

帰還の途についた。邦人達は甲板に出て離れゆく陸地をながめながら涙していた。住み慣れた土地への惜別の涙でもあったろう。また祖国とはいえ、見知らぬ土地での行く末を案じての涙でもあったろう。いつまでも甲板にたたずんでいた。

我々の艦のみは、さらに邦人を収容するため、途中より艦列を離れタクロバンに向かった。タクロバンはレイテ湾奥にある。湾に入ると水兵数人とパイロットを連れた監督官が乗り込んで来た。水兵の一人は中国系の二世で、艦橋には航行隊形、速力区分、緊急信号等の表示を掲げてあったが、漢字が読めるとみえて、同僚に得意げに説明していた。

監督官は中佐であった。パイロットと共に五十も半ば過ぎであったろう。二人は艦橋の前部に腰

を掛け、前方を見詰めながら静かな調子で話を続けていた。ほとんど中佐が話し、パイロットは操艦をしながら時々うなずいていた。英語には弱かったが断片的には意味がとれた。

身の上話をしていった。彼は応召で三人の息子がいた。上二人は陸軍にとられ末の子は海軍にとられた。長男はガダルカナルで戦死し、その後、あと二人も戦死したと言っていた。彼は、自分の息子達は日本兵に殺された、と表現していた。殺した側の我々はすぐ側に立っているのに、日本兵を憎むとか、我々を敵視するとかの気配は全く感ぜられず、実に淡々と話していた。

タクバロンの夜は密雲が垂れ込めていた。船室では汗が吹き出て、とてもいられないので甲板で涼んでいた。誰かが何かの用事で灯を舷側へ垂らした。驚いたことに、灯に誘われて魚が下から沸いてきたのである。沸いては消え、消えては沸いた。丸々とよく肥えていた。急いで釣竿を持出し、何人かで釣にかかった。餌には鶏の笹身を

使った。当時では貴重品でなければなものだった。南の海は餌が豊富なのか、それとも笹身は餌として不向きなのか、見向きもされず一匹も釣れなかった。この状態が十分か十五分位か続いたろうか、沸きに沸いていた魚が急にすくなくなり、やがてすーっと消えるが如くいなくなり、静かな海に戻った。原因は分からなかった。ただむしろに名残り惜しかった。

翌日午後、邦人を収容し出発した。昨日の中佐が水兵と共に乗り込んできた。パイロットはいなかった。湾の程まで同乗し、同行の内火艇に乗り移り引き返していった。降りぎわに湾口には機雷が敷設してあるので用心するようにと注意した。これは以前日本軍により敷設されたものであろう。軍機海図に記入してあった。中佐に示すただうなずいただけであった。

レイテ湾は戦争末期虎の子の残存機動部隊を投入し、夜襲をかけて戦局の転換を図ったが、敵の

電探に捕捉され壊滅した痛恨の海である。何か手懸かりはつかめぬものかと、測深儀で叩きながら走ったが何の反応も現われなかった。

翌々日ころではなかつたらうか、朝から風が強く、昼前には嵐になった。波は時が経つにつれてますます大きくなり、前甲板は大きな飛沫をあげて半分位海中に没し、そのあと空中高く舞い上がるのであった。飛沫は艦橋の窓を叩き、艦首は右に左に大きく振れた。操舵手は舵輪にしがみついているのがやっとだった。傾斜は左右三十五度ずつ七十度の傾きをし、うっかりすると艦橋の端から端へ叩きつけられる程であった。簡易風速計を右手に持ち、ちよつと窓の外に出した途端腕がもがれそうになり、あわてて引込めた。示度いっばいの三十メートルか三十五メートルかを示していた。

当直を終え、よろけながら部屋に戻ってみると舷窓には海水が上がったり下がったりして、まるで水中で目を開けているような感じがした。

軍医長と同室であったが、彼はうつかり眠り寢台から放り出され、したたか体を打ち、痛い痛いとこぼしていた。日本からの気象無線が入らなかつたので確かな事は分からなかつたが、恐らく台風に遭遇したのであろう。大砲を降ろし艦が浮き上がった分バラストが積み込まれてあつたので重心が下がり、復元力が増していたのであろう。そして転覆も免れたのかも知れない。

嵐のあと二、三日して死亡が一人だ。そして更に二、三日してまた一人亡くなった。一人はおばあさんであり、一人は二十歳前後の娘さんであつた。どちらが先、どちらが後だったかは思い出せない。水葬を行うことになった。遺体をハンモックでくるみ、その上を日の丸の旗で巻いた。遺族、知人、非番の乗組員は甲板に集まつた。ラッパを吹奏し葬いをした。

艦を止め、遺体には重しをつけて静かに降ろした。海は静かであり、水は透明だった。遺体はゆるやかに沈んでいったが、途中で沈下が止まり、

水中で漂うたようであった。遺体はいつまでも見えていて、別れを拒むかのようにであった。遺族は慟哭し、しぼるような声をあげていた。機械の回る音がし、艦は静かに動き出した。遺体の周りを三度周り、長い汽笛を鳴らして最後の別れを告げた。この水葬は二回行われた。水葬は一般にはなじまない。さぞあきらめ難いものがあつたらう。嵐にあうまでは邦人達は時々甲板に出ていたが、嵐でぐったりとなつたのであろう。その後は港に入るまではほとんど見受けなかつたようである。

鹿兒島の加治木に着き、ここで上陸させた。鹿兒島に一泊し我々は呉に向かいこの航海は終わったのであるが、もう初冬になつていた。

このほか、終戦直後、復員前に樺太への引揚げに二度行った。ソ連軍艦との接触を警戒しての航海で緊迫の連続であつた。これにまつわる思い出もあるが割愛する。

【解 説】

引揚輸送業務

復員中の艦艇乗組員は「邦人引揚輸送要員」として旧艦艇に復帰するよう新聞等で呼び掛けがあり、体験記筆者の一ノ瀬氏はこれに応じた。

当時、日本の艦船の多くは戦中、損害を受けたり、沈没したり、米軍の「LST」、その他戦勝国の船舶をもつて復員業務をしていた。

比島は激戦地で港湾の施設等の破壊も甚だしかつたためか、ダバオ接岸は許されず、岸から離れた所に投錨し、水陸両用の自動車様の船がハシケとなり、邦人の年寄り、子供を乗せて往復し無事収容した。それらの邦人は、山中に逃げ込んでいたのをキャンプに収容されたとのこと。その人は涙を浮かべ感謝をしていた。随分苦勞の末の乗船であり当然であろう。

戦争は（特に比島）軍人のみでなく、一般非戦闘員も随分苦勞の末、生を得ての帰還である。

比島戦の悲惨さは軍人のみでなく、在留邦人は

戦中、逃避等、老幼女子の苦勞は涙無しでは語れなかつたという。

邦人達は甲板に出て離れ行く陸地を眺め、涙していたという。その後台風に遭遇、邦人死者の水葬をしたという。一人はおばあさん、一人は二十代の娘さん、遺体をハンモックでくるみ、その上を日の丸の旗で巻いた。遺族、知人、非番の乗組員は甲板に集まり、ラッパを吹奏し葬送をしたという。遺体は仲々沈まず、別れを拒むかのようにあつたという。

遺族は、しぼるような声を上げて、慟哭したという。船は遺体の周りを、三度回り、長い汽笛を鳴らして最後の別れを告げたという。

戦中の苦しみ、戦後の逃避、そして、水葬と、悔やむ者も、悔やまれる者も、戦を越えた悲劇である。筆者一瀬氏も、家郷において、家族との語らいを延ばし、復員、邦人帰還業務に従事し、特に前記の如き、水葬に立介したことは、生涯忘れ得ぬ体験であつたと思われる。